

血液事業とは

「血液事業」とは、一般に、血液を提供していただけ
る人を募集し、人の血液を採取し、血液製剤（人の血液
又はこれから得られた物を有効成分とする医薬品。輸血
用血液製剤と血漿分画製剤がある。）として、治療を必
要とする患者さんのため、病院等に供給する一連の事業
のことといいます。

平成19年には、全国で1年間に約494万人（延べ数）の方々に献血の御協力をいただきました。血液は、現代の科学技術をもってしても、未だ人工的に製造することができません。また、献血いただいた血液は、患者さんの治療目的に合わせた分離・加工がなされ、輸血用血液製剤や血漿分画製剤^{けっさく}となって、治療に使われますが、血小板製剤など、その有効期間が非常に短いものもあります。

こうしたことから、常に誰かの献血、善意が必要とされています。

血液製剤は人の血液から作られるため、ウイルス等の混入による感染のリスクがあることが知られていますが、より安全性を向上させるため、様々な取組がなされています。日本赤十字社では、献血いただいた血液に対して、血清学的検査やB型肝炎ウイルス（HBV）、C型肝炎ウイルス（HCV）及びヒト免疫不全ウイルス（HIV）の核酸増幅検査（NAT）を実施しており、平成19年1月からは全ての製剤について白血球を除去する製造方法を導入しています。また、血液製剤による感染

ミニコラム

献血者数と実際に血液製剤を投与された患者数(推定)

平成18年の献血者数は、全血採血と成分採血を合わせて、約499万人（延べ数）でした。一方、実際に血液製剤を投与された患者数を正確に把握することは現実には難しく、全国規模での統計はありませんが、東京都での平成18年輸血状況調査集計結果に基づき、以下の方法で全国の輸血患者数を推定したところ、約100万人となっています。

全国の推定輸血患者数 =

輸血用血液の年間総供給
単位数(全国分)
東京都輸血モニター病院の
年間総輸血単位数

※同一人が最後に輸血を受けてから30日以上間隔をおいて輸血を再開した場合は、それぞれ1人として算定。

が疑われる事例が発生した場合には、遡及調査を行い、速やかに回収等の措置がとれるようになっています。

また、血液製剤は人の血液を原料としていることに鑑み、倫理性、国際的公平性等の観点から、国内自給が望ましいとされています。我が国では、採血の対価として金銭を提供することを禁止し、国民のみなさんの善意による「献血」の推進を図り、国内自給の達成に取り組んでいます。

いのちをつなぐ



りょうすけくんと妹のなっちゃん

A black and white photograph showing a man in a hospital bed, wearing a tie and glasses, looking towards the camera. A woman with dark hair is sitting beside him, also looking towards the camera. They are in a hospital setting with medical equipment visible in the background.

神戸・三宮センタープラザ献血ルームでの

りょうすけくんと妹のなっちゃん
平日の時間。「なのに、なんにこだわんのか献血を来てくわいいる。あらがどく、ついでに、待ち合はばいしない、涙が出てきた」
当時、成田麻理子は病院勤務。涙が止まらない針灸師。せん看護師がよくにいふの、大丈夫?と気にしないといきつれまた。それが、この記憶をあらわして、そのうえで残っているのです。1ヶ月後、宮にある献血ルームを訪れて、このがはじめて初めての外出でした。

平成19年2月1日発行

赤十字新聞から転載

テレビ新広島のHPにも、
りょうすけくんのことが
取り上げられています。

<http://www.tss-tv.co.jp/news/anpan/>

全国の輸血を必要とする患者さんに必要な血液を必要な時に届けることはとても重要です。生命の維持に欠かせない血液を安定的に供給するための施策は血液事業の中心施策のひとつです。

さらに、このような安定供給の観点から、また、患者さんへの血液を介する感染症や副作用等を減らすため、血液製剤の適正な使用が求められているのです。

血液製剤は病院など医療機関という限られた場所で使われており、また、血液製剤の種類によっては、特定の

疾患を持つ患者さんのみに使用されているものもあります。このようなことから、実際には、献血によってどのように人が人を助けているのかは、一般の人からはなかなか見えにくいものです。

ここに紹介するのは、小児がんと闘った4歳の男の子のお話です。輸血のことを「アンパンマンのエキスだ」と言って、人から血液をもらうことに感謝し、病気と果敢に闘ったことが綴られています。

血液事業に携わる関係者は幅広く、国、都道府県や市町村、日本赤十字社をはじめ、血液製剤の製造販売業者、製造業者、販売業者、実際に製剤を使用する医療機関、患者の方々、そして、献血に協力してくださる企業やボランティア、国民のみなさん。このように多くの人々の協力により、血液事業は成り立っています。ひとりでも多くの人を救いたい、そんなひとりひとりの思いがこれからも血液事業を発展させていくのです。



献血の仕組みについて

献血ができる場所には、お医者さんや看護師さんその他にも、呼びかけなどをするボランティアの方がいます。献血には、一度でも輸血を受けた人は献血できない、という決まりがありますので、輸血によって生き力をもらった人が、ボランティアで献血の仕組みを支えていることもあります。

献血ルームなど



日本赤十字社 血液センター

献血された血液を患者さんに輸血できるように、血液の安全性を検査し、病院に届けるための準備をしています。また、献血をしてもらった血液を成分ごとに分けて目的にあつた血液を作ったり、保管したりする大切な役割もあります。



病院・医療機関

血液センターから血液を受け取ると、患者さんに輸血を行います。病院で必要な用に血液が必要になると、血液センターと密接に連絡を取り合っています。緊急時に備え、より多くの血液を確保する必要があります。



(平成19年度版「けんけつHOP STEP JUMP(生徒用)」より)